観光立国の実現は、地方（地域）から

アジア観光盛り上げよう

新春対談

東京スカイツリーの開業やLCC（格安航空会社）の登場など2012年は旅行にかかわる話題も数多かった。一方、東日本大震災からの復興という大きな課題も残っている。日本旅行業協会（JATA）の菊間潤吾会長と全国旅行業協会（ANTA）の二階俊博会長は、旅行市場の現状をどうとらえ、今後どう旅行業団体の舵取りをしていくのか。年初恒例の対談で、両者はきたんなく意見を交わした。（東京都千代田区のパレスホテル東京で）

日本旅行業協会（JATA）会長　菊間潤吾氏

全国旅行業協会（ANTA）会長　二階俊博氏

――（司会＝編集部次長・板津昌義）観光業界にとって12年もさまざまな出来事があった。この1年を振り返ると。

菊間　LCCが本格的に就航したのが大きなニュースだ。国内だけでなく、韓国、台湾といった近隣のアジアの国々にも就航し、新しい旅行需要が創出される年になった。LCCは世界的に見ればだいたい航空座席の30％ぐらいのシェアがある。日本ではまだ始まったばかりだが、どんどん増えていくだろう。5月の東京スカイツリーの開業や10月の東京駅舎の復元など、集客力のすごく強いものができたのも、需要創出の年と言うにふさわしい1年だった。

二階　まったく同感だ。スカイツリーが予想以上に大きな展開を見せている。これは単に旅行業界、観光業界だけではなく、日本全体がややもすると閉塞感に陥りがちなところをスカイツリーがみんなを元気付けた。また、東京駅は、国民のみなさんが旅行、観光という場合には一番センターに置いて考えている。東京駅が新装、そして、たいへん立派になったことは一国民としてもうれしい。

菊間　旅行需要は東日本大震災後に落ち込んだが、リカバリーするなど、旅行需要の根強さをすごく実感した年になった。海外旅行は14カ月連続で前年度アップをして、過去最高の数値にまで届きそうな勢いだ。国内旅行に関しても前年度増がずっと続いていて、震災前の水準まで戻っている。我々旅行会社は、こういったマーケットを刺激できるようなものを多くしていかなければならない。

二階　ANTA会員は営業の軸足が国内旅行にあるが、我々は今まさに国際社会の一員であり、海外旅行を抜きに旅行は語れない。特に先般、中国の万里の長城での遭難事件があったが、ああいうことは単に中国という地域だけでなく、オールニッポンの旅行、観光に影響を及ぼす。旅行業に携わる者は旅行のお客さまの安全を守る。旅行にご案内して無事帰宅するまでが我々の責任だということを改めてあの事件を通じて思っているところだ。

菊間　高速ツアーバスの問題。ツアー登山の問題。今、二階会長が言われたように、安心、安全が厳しく問われた年でもある。

二階　8月27日から30日まで、日中国交正常化40周年の訪中団を編成して、空海が若い頃に学ばれた西安の都を訪ねた。西安で空海の法要をすると同時に日中関係のためにお互いが協力しようと唐家璇（トウカセン）中日友好協会長（中国元外務大臣）と私が講演で誓い合った。この訪中団に菊間会長に終始ご一緒いただき、ご協力いただいたことに感謝している。

菊間　観光は民間交流だ、平和産業だとかいろいろ言われるが、二階会長と同行させていただき一番感じたのは、誠実に相手と向かい合って、民間交流を営々と途切れることなく続けることが、相手の信頼を得るということ。二階会長がずっとやってこられた日中交流のベースがなかったら、あれをどんな著名な人が旗を揚げたって、中国側は全然動かない。観光の重要性を改めて再認識させられて、自分個人にとってもすごく意義のある体験だった。

尖閣諸島の問題で日中は、今なかなか難しい状態にあるが、40年の間に何回か同じようなことがあった。それを乗り越えて、脈々と友好を発展させてきたわけだから、我々はこであまりひるむことなく、努力していかなくてはならないと感じた。

東北復興を長期的に支援　菊間氏

民間交流で日中雪解けを　二階氏

二階　私は空海の法要を計画していることにご協力をいただこうと、中日友好協会の唐会長にお会いした。日中の状況が険しい雰囲気になっていたので、早朝7時過ぎから二人きりで会い、「本当のところ日中関係はどんな状態か」と聞いた。そのとき、「領土問題が絡んでいるだけに今回は複雑で険しい状況になっている」ということを唐先生がややお鎮痛の面持ちで語ったことが印象深かった。

そうはいっても、菊間会長が言われたように、日中友好は昨日今日に始まったことではない。国交回復40周年の記念すべき年にして、このような状況になったことは、中国側も反省してもらわなければいけないが、日本側も日本外交という面において、政治が責任を果たさなければいけないことだ。国際会議に行っても日中の首脳が互いに目礼もしないで通り過ぎるという状態だ。これは隣近所だったらどうなるのか。テレビを通じてあのようなことが全世界に流れることは、日中にとっても、アジアにとっても残念なことだ。

我々はおのずから限界がある。限界があるが、我々の立場を通じて旅行・観光交流でもっとこの険しい状況の雪解けをさせていかなくてはいけない。いつも菊間会長とそう話し合っている。

菊間　JATAの会長になって一番勉強したのは、ANTAの活動のやり方だ。いろいろあるが、一つは、東北へ行き、各県を視察した。そういうまとまった活動を起こして、短期的でなく、今後商品造成をして長期的に東北の復興を支援する形を作り上げていく。

JATAは海外旅行という感じがするが、JATA全体で7兆円ぐらいの取り扱いがあるうち、平均すると6割が国内旅行で4割が海外旅行だ。国内の宿泊旅行で言えば83％ぐらいがJATAの会員が取り扱っているという事実がある。私自身は海外旅行しかやっていない人間だが、会員全体の売り上げとかいろいろなものを見ると、国内の振興をもっと強化していかなくてはいけない。

二階　日本の観光をここまで盛り上げてきてくれたのは、一にも二にもJATAだ。JATAがリーダーシップをとって、我々のANTAが遅れて付いていっている。特に海外旅行に至っては、ANTAの旅行会社もようやく目を向けたところ。JATAの皆さんはすでに海外にも拠点を持っていて、ANTAはそれを活用させてもらっている。だから、ANTAは謙虚に弟分として見習って、JATAに続こうと呼び掛けている。

私は運輸政務次官や運輸大臣を合わせて4回やらせてもらったので、JATAだ、ANTAだという気持ちはあまりない。今までずっと眺めてきたが、今が一番、JATAとANTAが仲良く手を携えてやっている。今年も頑張りましょう！

JATAとANTAの連携を誓って菊間会長と二階会長ががっちり握手

――国内旅行も海外旅行もようやく明るさが見えてきた。13年はどんな年になるだろう。また、会長として、どんな年にしたいか。

菊間　国内旅行で言うと、着地型観光を推進するため、地域限定旅行業が制度化される見通しだ。自分の地域を愛し、地域の良いところをもっと紹介していきたいという人たちがいろいろな商品作りをするのはとてもいいことだ。我々旅行会社が現地をちょっと視察して作るよりも愛着が違うし、紹介する深みが違う。消費者にとっても新しい地域限定旅行業がやる着地型旅行はすごく魅力的なものになるだろう。今まであった国内旅行と違った価値のものがいっぱい登場する。13年はそういう意味で面白い年だ。

旅行会社はそれを意識して、現地の観光素材とか、食とか、その人たちに負けないように価値あるものを見出していかなくてはいけない。地方でできる着地型観光の良い商品がたくさん出てくると思うが、旅行会社としてはそれをうまく取り込んで、流通に乗せるとか、一般に紹介していかなくてはならない。

二階　着地型旅行はANTAも、それぞれの地域で取り組みを進めている。大きな催しとしては、1月23、24日に群馬県で「国内観光活性化フォーラム」という旅行の大会を行う。地元の受け入れ側の協力者は、福田康夫・元内閣総理大臣にこの役をお願いした。せっかく総理大臣経験者までご協力をいただくことになった以上は、韓国や中国から旅行関係の専門家や航空会社の幹部などを招きたい。そして、旅行、観光は世界一体だと改めて確認する必要がある。

尖閣諸島や竹島の問題にしても旅行、観光関係に如実に影響が及んでいる。しかし、それを打開することも観光の果たす役割だ。

国内観光活性化フォーラムは、群馬県の次の年は私の地元の和歌山県で開催する予定だ。これも1万人ぐらい来てもらおうと今から県を挙げて準備に取り掛かろうとしている。

「研究センター」柱に活動　二階氏

主体的にマーケット創る　菊間氏

この前、二階会長はブルネイから勲章を贈られた。中国だけでなく、韓国やブルネイなどとの相互交流にも相当力を入れている。世界中がアジアの動向に注目してアジアの観光が動いているから、アウトバウンドも、インバウンドも、そういった国々と力を合わせて、いろいろなことを形にするいいタイミングだ。我々が東アジアの交流をもっと密にして、いろいろなことを世界に発信していくことが日本の国益にも適う。

菊間　二階会長がいつも言われている「アジアの大交流時代」が来ている。世界の観光の人たちは今、アジアの動きしか見ていない。特に東アジア。世界中の航空会社もホテルも、ヨーロッパやアメリカの状況があまり良くない分、みんなアジアで黒字にしている。

二階　今、菊間会長がおっしゃったことは、いみじくも私も考えていることだ。そのことに関して私は正月に菊間会長と改めて話し合ってみたいと思っていた。

私が小泉内閣で経済産業大臣を承ったときに、これからはアジアだと、アジアの問題に道筋を付けていこうということで、100億円の予算で「東アジア・ASEAN経済研究センター」を立ち上げた。これは東アジア6カ国とASEAN10カ国の16カ国で形成するアジア版OECDと言っていい。本部をインドネシアのジャカルタに置いた。

その当時に金融関係などの中小企業や団体に、給料はそちらでもってもらいたいが、一緒に勉強する気持ちがあれば一緒にやろうと呼び掛けた。それが今はずいぶん成果が上がっている。観光関係団体にも人材がいるのだから、ジャカルタに派遣し、常駐させることがあってもいい。私は近々、この16カ国の中の代表的な四つ、五つの国を回って歩こうと思っている。この東アジア・ASEAN経済研究センターを今後のアジア観光のメーンにしていきたい。それで近いうちに菊間会長のところにご相談に行きたい。

菊間　構想が大きい。二階会長はそれをどんどん現実にしてしまうからすごい。

――菊間会長はJATA会長に就任して1年目。会長としてやりたいことがたくさんあるのでは。

菊間　JATAの会長になって思うのは、インターネットの普及などで、旅行会社の必要性が問われる時代が来てしまう可能性もあるということ。だから、旅行会社の存在意義をもっと高めないといけない。そのためには今までのような利便性を追求するだけの旅行業ではなく、満足度とか楽しさの提案をできる産業にならないといけない。高速ツアーバスやツアー登山の問題で、改めて安心・安全の旅を提供する信頼ある旅行業界にしなければと思った。

私は旅行会社のプレゼンスをどう高めていくかを考えて施策を打っていくつもりだし、実際にこれまでもいくつかやってきた。旅行会社としてしっかりとしたものをマーケットに提言できる形を構築していかないと、今後、旅行者数は伸びても、その旅行に旅行会社が本当に必要なのかという時代に入ってしまう。

二階　まったくその通り。これから、来世紀も含めて、旅行会社がいかなる存在でいられるか。私もこのことを常々案じている。

この頃、学生たちが自分でどんどんインターネットで旅行の手配をするようになってきた。なにもネットエージェントと競う必要はないが、旅行、観光の世話をして手数料を受け取る仕事だけでなく、プロの旅行会社としてどういうメリットをお客さまに提供できるかが問題だ。

これからは旅先において、文学の面ではどういうテーマがあるか。美術の面ではどういうテーマがあるか。そして、どんな農産物、海産物、あるいはお土産がそこで購入できるのかということに対して、もっと濃厚なアイデアとキメの細かい提案が必要だ。「あの旅行会社はさすが地域の状況に詳しい」と言ってもらえるようなことをやらないと見放される時が来る。これからJATAもANTAも一緒になって、この喫緊のテーマに真剣に取り組みたい。

菊間　JATAは、十数年前から海外旅行2千万人を目標に掲げてやってきた。中国問題はあったが、おそらく12年は初めて1800万人を超え、1850万人ぐらいの数字になる。国の目標では16年までに2千万人だが、13年を2千万人の足掛かりになる年にして、1年ぐらい前倒しで目標を達成したい。

そのためには旅行会社が主体的にマーケットを創造する動きを強めたい。それは旧来型のツアーの延長線上で成し得るものではないから、いろいろなものを開発する。旅行会社は自立して、自分たちで物事を作り上げていくという腰の入った動きをするべきだ。満足度の高いものを提供することに尽力をして、世界にアピールしていけば、世の中全体がもっと楽しいことになってくる。マーケットもそれを、我々旅行会社に期待している。

二階　昨今、東北だけでなく、各地で災害が起きて、ショックもあったし、経済の落ち込みもあった中で、我々の仲間の企業を倒産に追い込んではならないということが一番頭の痛いところだった。だが、関係者の奮起と努力で、そういった問題はやや乗り越えた感じがする。今年は反転攻勢に向かっていく年だ。だから、観光関係ですばらしいテーマを次々と作っていきたい。旅行、観光業は努力すれば努力しただけの効果があげられる仕事だ。世の中が明るくなるようにしっかり太鼓を叩いてやろう。